

大阪府立江之子島文化芸術創造センター
アーティスト・サポート事業
[enoco study#1] 実施報告書
友枝 望

目次

I. 3ヶ月の制作プロセス

1. 収集の為のチラシ作成
2. 地域（此花区、西区立売堀を中心に）呼びかけ
3. 置物の写真撮影
4. 置物データと解説シートの作成（wikipedia・その他のインターネット・書籍等から）

II. 貸し主との対話

III. 置物についての考察

IV. 今回集まった置物に関する考察

V. 総括（3ヶ月の制作と展覧会を終えて）

I. 3ヶ月の制作プロセス

1. 置物収集の為のチラシ作成

家庭や商店の置物を収集する為、配布・掲示用チラシを作成し、周知を働きかけた。

チラシの置物イメージが強かった為か、伝統工芸や古いものを主に持ち寄っていただくことが多く、新しいものが集まらなかったことが課題としてあげられた。



※右図：呼びかけ用チラシ

2. 地域（此花区、西区立売堀周辺、その他地域）に呼びかけ

まず、enoco周辺（広教地区）の会館に協力を要請し、定期行事である「ふれあい広場（隔週金曜日）」に参加。積極的に地域の方々と歓談をすることができた。何度か参加することで、最終的に置物を貸していただくことが可能となった。

また、滞在場所であった此花区のリサーチ・呼びかけを行い、同様に通勤路である福島区野田においてもリサーチ・呼びかけを実施した。

実際に置物を貸していただく際には印鑑を準備し、借用書とともに個人情報管理シート作成。そしてその管理を徹底した。

個人でリサーチする際は、商店・飲食店を中心に呼びかけを行った。



友枝 望

〒554-0001 大阪府大阪市此花区鶴野2-4-16
マンション第21号 11号室 (日10月中旬まで)
tel:050-3772-7979 / email:nozomitomoeda@gmail.com
http://www.nozomitomoeda.net

※右図：借用書と名刺

3. 置物の写真撮影

拝借した置物は、スタジオに設置した仮設の撮影セットにて順次個々撮影した。これは博物館的な資料作成の行為を実践するものであった。



※右図：CLUSTER、写真の詳細（例：no. 001）

4. 置物データと解説シートの作成（wikipedia、インターネット、書籍から）

また、上記した撮影の後、それぞれの置物を調査（wikipedia、インターネット、書籍などから）し、本来付随する置物の意味や、広義的な付随要素の解説文を作成した。置物データではそれぞれ油性ペンによるドローイングと名前、詳細なサイズ、置物にまつわる思い出や飾られている場所を記入した。解説文では、鑑賞者自身が置物に付いて記入するスペースを設けた。

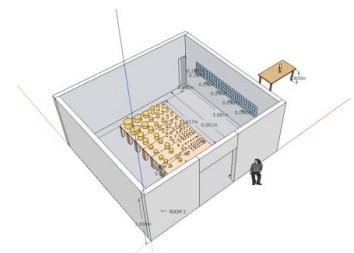


※右図：CLUSTER、置物データと置物解説（例：no. 001）



5. 展示会場のインストール計画

展示会場（ルーム2）での作品展示イメージを広げる為、googlesketchupにて3次元モデルを作成、効果的な展示空間になるよう計画した。



※右図：CLUSTER展示計画

6. 展覧会（作品）タイトル計画

タイトル「CLUSTER」は同種類のものやひとの群れをさす言葉から引用された。これは当初の目的（収集、分類など）を表し、基本的な置物のイメージ（知らず知らずのうちに集まる、家庭の特定の場所に群生密集する、個々の異なった所有物を一カ所で展示する）に適合した言葉であると考えた。同時にぶどうや花などの房という意味があることから、枝分かれし系統図のようにみだてて展示されることをも想定し展覧会名へとあてた。

II. 貸し主とのやりとり

3ヶ月の滞在で、多数の町の方々と対話を進めてきた。最終的に貸し主となった方々は、「置物に全く価値を見いだせない」、または「お気に入りでも重宝している」と両極端の意見をお持ちだったように思われるが、やはり今回の企画に賛同していただいたというのが一番の決定打であった。ある商店に飾られていた招き黒猫は、お店の守り神で「縁起物」ということもあり、借用には至らず、また青果屋さんに飾られていたひょうたんは、店主の知人からの贈り物、かつ縁起物だった為これも借用とはいかなかった。

商店では商売ごとに縁起のある贈り物が多く飾られていた。これらの大多数はお客さんからの贈り物であった。その際の思い出話は興味深いもので、記憶を再び持ち主本人に再確認していただく作業になった。

III. 置物についての考察

置物は時代とともにその素材や形態、置き場所などの推移が見てとられる。例えば技術の発展、安価な素材の流通による置物自体の変化である。手工芸的な置物は、大量生産品へと変化し、100円ショップで手軽に入手可能な「キッチュな置物」へと変容している。また、家庭で置かれる場所にも注目したい。日本家屋に見てとれる仏間や違い棚などは、西

洋的なホワイトキューブの空間へと急速に移り変わってしまった。このことにより、置物を飾る場所は限定され、最終的には押し入れの中へと消えていく状況も少なからずである。そして電化製品であるテレビの存在は置物の場所に劇的な変化をもたらしている。大多数の家庭において置物は、テレビの上に飾られていた。昭和の時代から近年まで存在していたブラウン管テレビ上のスペースは適当な飾り場所であった。しかしブラウン管テレビは液晶テレビにとってかわり、か細いスペースとなってしまった。この変化によって置物は、別の場所へと移住する必要性を迫られたことが伺える。

IV. CLUSTERで使用した置物に関する考察

作品《CLUSTER》は多種多様な置物によって構成された。年代にすると古くは大正時代から、そして現在も生産されているキッチュな置物までが収集された。制作プロセスで前述したように、募集チラシによって貸し主の置物のイメージが少し偏ってしまった為、現代のものは少量にとどまった。これは所有者の年齢・世代に大きく関わっており、若年層の所有する新しい飾り物には大層な思い出や記憶は見いだすことができなかった。

そして集まった置物には縁起物や記念品、お土産といった置物としての理由が存在するものから、全くの詳細が不明のものが混在したため、情報が容易く入手できるものとはできないものに分かれた。

V. 総括・3ヶ月の制作と展覧会を終えてみて

制作と展覧会を終え、家庭での「置物の存在」とそれらを「飾るという行為」を再認識し、個別に対話をした貸し主へとわずかながらの知識を還元できたように思う。今回このような制作プランを提示したのは、そもそも置物学習を公に実践したかった為であるし、置物の所有者に私が調査し拾い集めた意味や由来・来歴をすこしでも知ってもらうことで、生活にすこしでも豊かさを感じてもらい、不思議な飾り物に囲まれて生活していることを誇らしく感じてもらいたかった。収集し、飾る。これはアートコレクターの基本作業といえるし、置物を飾る行為は置物という概念に左右されがちではあるが、美術的行為といえ

る。一つ一つの置物の種類がたとえバラバラでも、飾り方、まとめ方一つで作品のようななにかとして成立する。大袈裟に言うと、美術館で開催される展覧会はその調査・収集の延長線上にあり、家庭の置物もテーマ一つで美術表現に仲間入りすることが可能である。

展示レイアウトでは置物を調査し分類を行い、大きさと種類・形態を関係性ととも配置した。よく観察すると、こけしのそばには木彫の置物やボーリングのピンなど、伝統工芸系列の人形の流れなど顕著に表した。写真も同様に展示した置物と呼応する形で配置した。置物を撮影した写真と置物をデータ可した二枚一組のシートは、今回の滞在制作で唯一手もとに残った作品である。これは「借りる」行為の介在を作品として残す重要な構成要素となった。